

ラフスケッチとしての 一橋大学管弦楽団百年史

高橋 広
(平 6 法)

1. はじめに

間もなく創立 150 年を迎えようとする一橋大学における課外部活動は、ボート部（端艇部）を筆頭に運動部・文化部とも長い歴史を有し盛んな活動を行なっているものも少なくないと思われるが、筆者が所属していた**一橋大学管弦楽団**（以下**一橋オケ**）も百年以上の長い歴史を持ち（はじめの 40 年は現在の**コール・メルクール**と一体となり**音楽部**と称していた）、現時点ではコロナ禍ゆえに大きな制約を受けているとはいえ、極めて積極的な活動を展開している。現在筆者は一橋オケの正史を執筆中であるが、今回は紙数の関係もあり、ごくラフな概略ではあるが、一橋オケの歴史を振り返ってみたい。

2. 前史と第一期（1919 年～1945 年 8 月 15 日）

まず音楽部創設前の前史を、簡単に振り返ってみたい。残念ながら一次資料はないのであるが、1885 年頃から翌年にかけて**一橋唱和会**という団体が存在していたらしく、それが恐らくは一橋大学の音楽関係の集まりの嚆矢であろうと思われる。その後、1899 年頃には**東京商業学校唱歌会**という団体が、また 1902 年から 1906 年にかけて**一橋音楽会**（のちに**一橋会英語部音楽会**）という団体も活動していたようである。

現在に繋がる活動が始まるのは恐らく 1917 年からである。この年、川口輝武氏、吉野岳三氏（共に 1919 年卒）などが集まって合唱を始め**一橋音楽会**（前述とは別）を結成、英語部英語大会の余興で、讃美歌やフォスターの作品を歌っていた。これが**コール・メルクール**の元祖といえる。しかしこれを聴いていた、当時も最大勢力を誇っていたボート部の人々は、足をガタガタ踏み鳴らし、「**チヨールス**、**チヨールス**（Chorus＝コーラスのこと）」とさかんに野次ったそうである。

一方 1919 年に、隈元昂氏、渡辺義雄氏、細野武彦氏（共に 1923 年卒）の 3 人がオーケストラを作ろうと企図して、**一橋トリオ倶楽部**を設立し、会員を募集。そこに卒業後も卒団生の中心人物となっていく加藤政直氏（1924 年卒）らが加わり 7 人ほどの団体となった。この**一橋トリオ倶楽部**がオーケストラ部の起源となる。一橋トリオ倶楽部はこの年秋の英語部英語大会でグノーの歌劇「ファウスト」から行進曲などを演奏し、これが初舞台となった。

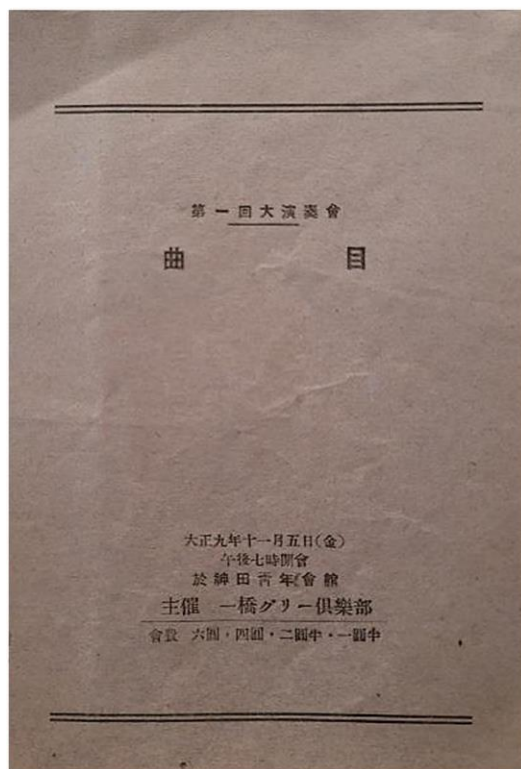
日本の大学オーケストラ（というよりも、後にオーケストラに発展していく器楽演奏集団）



の歴史を繙くと、1919 年の一橋大学に先行するのは筆者の調査では僅かに 6 大学に過ぎない（慶応義塾大学（1901 年）、九州大学（1909 年）、早稲田大学・関西学院大学（1913 年）、神戸大学（1915 年）、京都大学（1916 年）の 6 大学。東京大学は一橋大学の翌 1920 年に創設された）。

また当時、日本にはそもそもフル編成のオーケストラというものは存在しておらず、日本での本格的な管弦楽演奏の嚆矢といわれるのは、山田耕筰が立ち上げたばかりの日本交響楽協会メンバーと満州で活動するロシア系演奏家とが 1925 年 4 月に歌舞伎座で合同演奏した日露交歓管弦楽演奏会であることを思えば、この公演に大きく先駆けた一橋大学を含む各大学のオーケストラ（の先祖）のオーケストラ創設を目指した活動が、如何に先駆的であったかお分かり頂けよう。そして実際各大学オケは、プロ演奏家と共に道なき道を切り拓き、日本の管弦楽演奏史を作り上げていったのである。

1920 年 4 月、本学が東京商科大学へと昇格したのと時を同じくし、一橋音楽会（合唱）と一橋トリオ倶楽部（器楽演奏）が合併し、舟橋確教授を部長に戴いて**一橋グリーン倶楽部**（後の音楽部）となった。ただ合唱は兎も角、器楽奏者は 7 名程度しかおらず、しかもこの時はまだ一橋会への参加も認められていなかったため活動費の支給すら受けることが出来ず、まずは資金集めのために演奏会を開こうということになり、東京音楽学校（現在の東京藝術大学）の教授陣を中心とした日本トップクラスの演奏家に出演して頂き、同年 11 月 5 日、当時の大音楽会場としては唯一の場所であった神田の青年会館にて「第一回大演奏会」を開催した。このように最初期の一橋グリーン倶楽部の演奏会は、団員の演奏ではなく、一流演奏家による公演であった。この第一回大演奏会の入場料は一等



記念すべき第一回大演奏会（1920 年）

が 6 円（現在でいうと 3～5 万円位か）と極めて強気の価格設定であったが、ほぼ満席となる大盛況で、一橋グリーン倶楽部の懐はかなり潤った（ちなみにこの時期のオーケストラコンサートとして最も格式が高く入場料も高額であったと思われる上記 1925 年の日露交歓管弦楽演奏会でも一等が 7 円（座席（恐らく特等）は 8 円）、1910 年の川上音二郎一座の演劇『オセロ』の一等が 1 円 70 銭、大ヴァイオリニスト エルマンの来日公演は一等が 12 円（特等 15 円）、恐らく戦前の歌舞音曲興行では最も高額だったであろう大ヴァイオリニスト フ



リッツ・クライスラー来日公演ですら一等 13 円（特等 15 円）だったことを思えば、一橋オケ先祖の第 1 回演奏会の入場料が如何に強気だったかお分かり頂けるかと思う）。ただ、官立学校の教授に公開演奏会に出演して頂く為には、学校当局に対して事前に了解を得なければならないというしきたりを一橋グリーン倶楽部側が知らずにオファーしてしまったため、公演直前に東京音楽学校側から出演差し止めの通達を受けてしまった。開催が絶望的となった状況を何とか打開すべく、公演予定日直前の嵐の夜、隈元氏・渡辺氏・細野武彦氏らが決死の覚悟で東京音楽学校の村上直次郎学長宅を訪れて懇望し、どうにかギリギリのところで通達が撤回され、公演が実現したのであった。

その後、年 2 回の公演に加え、第一次世界大戦終結平和記念大博覧会奏楽、名古屋演奏会、ウェールズ皇太子来日歓迎会など積極的な活動を行っていたが、1923 年 3 月、学制改革によりグリーン倶楽部主力メンバーが一度にごっそりと卒業してしまうこととなり、団は一気に弱体化する。さらに追い打ちをかけるように 9 月、関東大震災が起き、団はおろか大学そのものが、神田一橋の商大校舎が焼失するなどの壊滅的な打撃を受けることとなる。ただ焼失を免れた図書館裏に部室があったことから、建物は傾いたものの楽器は無事で、間もなく練習を再開することとなる。そしてその後有力メンバーが続々と加わり、陣容を徐々に立て直していったグリーン倶楽部は、長谷川庄一氏（1928 年卒、氏は卒業後も OB として音楽部を支え続けることになる）が委員長であった 1925 年に、念願であった同好会から音楽部への昇格を果たし、初年度予算 90 円を獲得したのであった。

その後、白井次郎氏・加賀行三氏・金井儼四郎氏（いずれも 1932 年卒）らがマネジメントを担当した 1931 年度は戦前でも最盛期とっていい輝きを見せた時期であり、彼らは 1925 年の日露交歓演奏会で初演された後、日本ではまだほとんど（ことによると全く）演奏されていなかった、当時の日本楽壇の水準からすれば超大作であったチャイコフスキー交響曲第 6 番『悲愴』を名指揮者・内田元氏を擁して熱演し、関東楽壇の話題を独占したことは大きく明記されてよかろう。白井次郎氏は戦後、尾羽打ち枯らして満州から帰国した朝比奈隆のため、関西交響楽団（後の大阪フィル）を設立すべく獅子奮迅の活躍をすることになるが、それについては朝比奈隆の自伝に詳述されている（『楽は堂に満ちて一朝比奈隆回想録』音楽之友社、2001）。

また戦前団員の中で演奏家として最も大成したのは、その 1931 年に入学したファゴット奏者の三田平八郎氏（1937 年卒）であった。三田氏は、在学中の 1936 年にモーツァルトのファゴット協奏曲 K. 191 を、卒業後の 1940 年にはモーツァルトの協奏交響曲 K. 297b を一橋オケ定期演奏会で日本初演するなど大いに活躍し、卒業後東芝に就職するも戦後音楽への想いを断ち難く、日本交響楽団（後の NHK 交響楽団）に入団して長く首席奏者を務め、日本ファゴット界の草分けとなったのである。

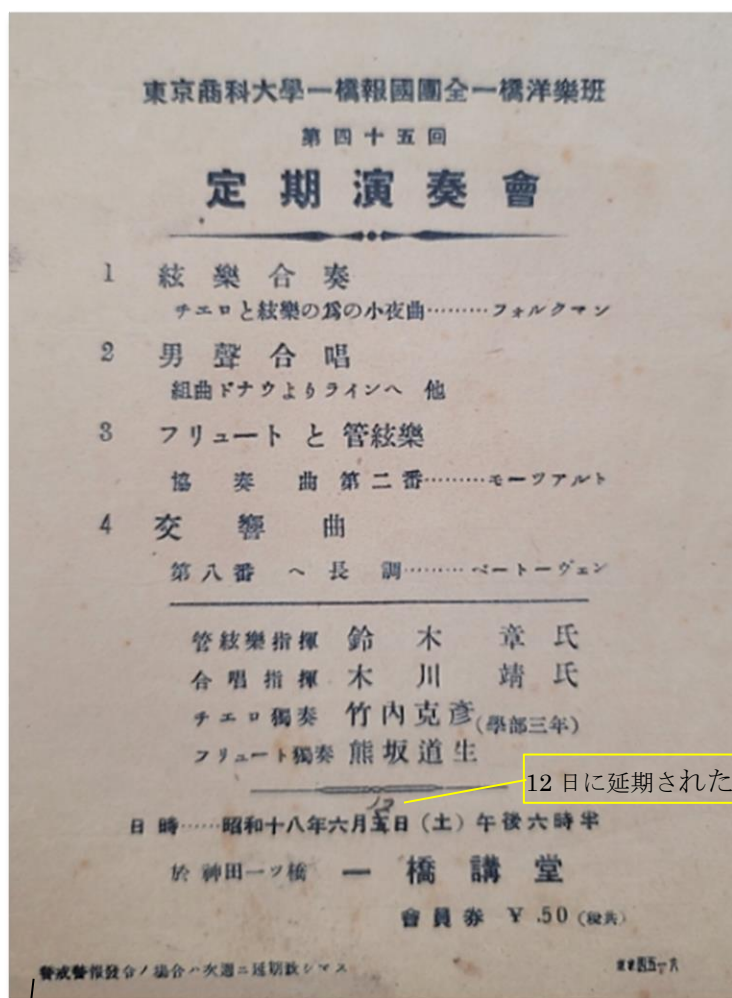
1935 年からは大妻女学校運動会でのジンタバンド（ダンスの伴奏、競争時のおはやし、休憩中の景気づけ等を終日行うもの）を少なくとも 5 年連続で引受け、1936 年からは合宿



も開始し、活動は一層華やかさを増すこととなった。1938 年には、当時日本で最高の組み合わせであったローゼンシュトック指揮する新交響楽団（現在の NHK 交響楽団。名称は新交響楽団（1926 年）→日本交響楽団（1942 年）→NHK 交響楽団（1951 年）と移り変わる）が演奏する第九演奏会で、合唱を担当した国立音大の合唱団の賛助に部員の多数が参加したことも大きなエポックであった。

しかし 1939 年には合唱の指揮者であった横田孝氏が出征するなど、戦争の暗い影が差し始める。1941 年には一橋会音楽部は一橋報国団文化部音楽班と名称を改称。

1942 年には、委員長であった竹内克彦氏（1943 年卒）が音楽部の存続をかけて理事会と掛け合い、外部から女性ソリストを呼ぶことを禁じられるも、どうにか存続は認められ、団員であったフルートの熊坂道生氏（1943 年卒）やヴァイオリンの石橋忠義氏（1944 年卒）をソリストに迎え演奏会を行っていたが、時流には逆らえず、1943 年 6 月の第 45 回定期演奏会を最後に音楽部は活動を休止することとなり、ここに 24 年に及ぶ戦前の一橋大学音楽部（オーケストラ部）の歴史は幕を閉じることとなったのである。その 4 か月後となる 10 月 21 日、明治神宮外苑競技場において、出陣学徒壮行会が開催された。そして兼松講堂及び構内一部は中島飛行機株式会社に貸与されたのであった。



戦前最後の演奏会（1943 年）

警戒警報発令ノ場合ハ次週ニ延期致シマス

3. 第二期（1945 年 8 月 15 日～1958 年）

敗戦から僅か 11 日後の 8 月 26 日には一橋報国団は解体され、自治的校友会へ再編するように通牒を受け、8 月 29 日には軍需用に貸与されていた講堂や校舎が返還された。音楽



部復活の正確な日程は確定出来ず、卒団生によって記載がまちまちだが、1945 年末か 1946 年初旬に細々とはあるが、コーラス活動と安川加寿子氏など一流演奏家を招聘した音楽鑑賞会開催などが行なわれたようである。

そして復員組の三浦正氏（1948 年卒）が 1946 年 4 月の評議員選挙に立候補して上位当選、そして久我太郎氏（1947 年卒）が理事会文化部理事に選出、どちらも予算獲得に奔走しかなりの成果を挙げた。6 月の新寮開所祝賀ダンスパーティを企画して音楽を担当したり、アルバイト先で弦楽四重奏を披露したりと、食べるのもやつの状態であっても音楽部員達はしぶとく音楽し続けていたのであった。

1946 年の一橋祭でも室内楽の披露はされてはいたが、オケの復活は 1947 年の一橋祭で成し遂げられた。オケは現役学生・OB・他大生の混合で、三浦氏の獅子奮迅の活躍により実現、戦前末期の偉大なコンマスであった石橋忠義氏の令兄・石橋慶道氏（1938 年卒）がタクトを振り、オケの歴史前半 50 年で最高のプレイヤーであったファゴットの三田平八郎氏も参加する華やかなものであった。

しかし第一期でも同じことが起きたが、主力組が 1947 年、1948 年で卒業してしまうと、音楽部はほとんど休眠状態となってしまった。壊滅の危機に際し、今日の隆盛に向け一気に音楽部を立て直したのが 1948 年入学の石原良氏（1953 年卒）であった。石原氏が入学した段階では音楽部はほぼ壊滅してしまっていたので、石原氏はまず東京学生音楽文化連盟の商大と津田の支部を作った上で、翌 1949 年からは猛然と活動を開始した。諏訪根自子や安川加寿子など当時のトッププロを招いた独奏会を 5 回開催、高名な音楽評論家・野村光一氏を招いたレコード鑑賞会を開催し、夏ごろからは合唱の練習も開始、そして 1950 年 1 月からは 4-8 名程度ながらいよいよオケ班も活動を開始するところまで音楽部を甦らせたのである。戦争と終戦のごたごたで、団所有の楽器が奇蹟的に戦火をくぐりぬけたヴィオラ 1 挺のみになっていたことを考えると、1948 年でいったんほぼゼロに戻ってしまったオケを僅か 2 年足らずで復活させたことがいかに大変な難事業であったか分かるものである。1950 年の大学創立七十五年記念一橋祭は合唱・オケとも整わず、やむを得ずショパン百年祭と銘打ち、ピアノ独奏と室内楽を演奏するにとどまったが、音楽部がいよいよ本格的に雄飛するのは 1951 年であった。風雲児・石原氏は二年連続音楽部委員長を務めつつ、評議員会に立候補・当選したのみならず、理事長にまで選出されてしまった。これにより、戦後は再び同好会扱いとなっていた音楽部が正式な文化部の一つとして復活し、文化部年間総予算 7 万円のうち 36%の 2 万 5 千円を音楽部予算として獲得したのである。演奏面でも、まず前の年に山田耕筰により作曲された新校歌のレコーディングで合唱を担当し、さらに 11 月の一橋祭ではコーラスやピアノとともに、オケもメンバー 14 名に音大生や一般大学生の仲間も加わり、戦後二回目のスタートを成し遂げたのである。

1952 年度からは石原氏のバトンを受け継いだ川島信氏（1954 年卒）が奔走して自治会評議員として予算をしっかりと獲得、新生音楽部はゴーイング・コンサーンとしての基盤を固



めた。5 月の音楽部総会では音楽部合唱班の名称が現在に続く「コール・メルクール」として決定され、さらに 6 月には津田塾との混声合唱練が初めて行われ、これにより混声合唱団「コーロ・ブリランテ」も成立したのである。

そして 1953 年 11 月 21 日、遂に戦後第 1 回定期演奏会（一橋大学音楽部秋季演奏会）が開催された。終戦から 8 年の歳月を要したが、ようやく音楽部は復興期から安定期へと少しずつ移り変わってきたのである。演奏会の構成は、合唱とオケ、オケ伴奏の合唱や大物ソリスト（音楽部 OB 大熊宏氏（1937 年卒）の御令室・大熊文子氏。ちなみに第 2 回定期のソリストはやはり音楽部 OB 川崎稔氏（1942 年卒）の御令室・川崎静子氏であった）のアリアなど豪華な内容であった。

OB の御令室ということでは、日本音楽界最初の女流作曲家である金井喜久子氏も、戦前一橋オケ黄金時代の卒団生・金井儼四郎氏（1932 年卒）の御令室である（一橋オケ定期に独唱者として出演したのがなれ初めであった）。彼女は 1956 年に制作されたアメリカ映画『八月十五夜の茶屋』（マーロン・ブランドが沖縄人通訳役を珍演）で沖縄音楽部分の作曲を担当しているが、恐らくこれは日本人初のアメリカ映画音楽作曲ではないだろうか。また 1960 年に作曲した歌劇『悲恋唐歌』は、歌劇としては異例となる歌舞伎座での上演であった。

1955 年 6 月からは旧三商大交歓音楽会が、大阪・東京・神戸の順で毎年行われることとなった。この演奏会は、3 つの大学合唱団がそれぞれ単独ステージを持ち、オケは三大学合同オケで大曲を演奏し、最後に三大学合同オケと合同合唱団で規模の大きいオケ付き合唱曲を演奏するという構成となっていた。以降三商大音楽会は、一橋音楽部にとって定期演奏会・一橋祭と共に最も重要なイベントとなっていく。

そしてオケは舩場準一氏（一橋大学名誉教授、1955 年卒、卒業後も院生として指揮を担当された）、竹中章氏（1955 年卒）、団内きつての理論派碩学で後に会社務めをしつつモーツァルト関連の著作も著された茅田俊一氏（1958 年卒）、渡辺精一氏（1958 年卒）はじめ個性的な名手を輩出し、数はさほど多くないながらも充実した活動を行っていた。特に舩場氏は、第 4 回定期から第 6 回定期のオケ指揮のみならず、第二期終盤のほとんどのオケ公演の練習指導と指揮を行い、オケの灯を消さずに持ちこたえさせた最大の原動力であり、尾原勝吉氏が常任指揮者になって以降もオケの部長としてオケを温かく見守り、導いて下さった大恩人である。

しかし、過去にも何度かあったように、充実した世代が卒業、乃至は最終学年になると、団が一気に危機的状况に陥るという状況が 1957 年に訪れたのである。そもそも団楽器保有は終戦直後のヴィオラ 1 挺と



オケとメルクールの合同公演
(1957 年)



いう状況からほとんど改善されておらず、新入生がオケに入っても、アルバイトなどで金を貯めて楽器を買うまではすることがないため、それが嫌さに新入団員の半分以上が退団してしまうという状況が続いていたのである。1957年4月の段階で、腕利きの4年生の大半が就職活動その他でゴッソリいなくなり、3年生7名、2年生2名、1年生は未知数という状況であったればこそ、1957年度マネージャーの中村正董氏（1959年卒）が強烈な危機感を覚えたのも当然といえる。かたや音楽部の合唱班であるコール・メルクールは当時既に70名の団員を擁する陣容で、正に飛ぶ鳥落とす勢いである。しかも戦前から戦後まもなくにかけての音楽部員は、歌も歌えば楽器も弾く、両方やって当たり前という緩やかな在り方で音楽を楽しんでいたものであったが、この頃は純粋に歌のみ、器楽のみを楽しむという学生が大半となり、両者の関係は疎遠になってきていた。しかしこのオケ衰滅の危機に中村氏は必死の活動を展開する。当時はまだ珍しかったマネジメント手法の徹底研究、オケ独自の部室獲得（それまではメルクール部室付属の小部屋のようなところがオケ部室であった）、部員繋ぎ留めのための部員実家行脚、オケ単独で行う戦後初の合宿、楽器購入資金獲得のためのOBの組織化、さらには文部省から多額の予算が下りる国公立大学文化連合会音楽会の一橋大学での開催権獲得などである。あまりにも過激かつ急激な改革を次々と断行したため、メルクールと軋轢が生じることもあり、この年にオケ・メルクールの分離案もかなりのところまで話が進んだが、当時のオケでは演奏会の単独開催はとても無理であったこと、さらにメルクールがオケに対し最終的に非常に寛容な対応をとってくれたこともあり、オケは突然の分離独立を避けた上で、獲得した資金によりコントラバスとティンパニという高額な楽器の購入に成功したのである。

しかし収益の分配（オケは楽器購入など金がかかる割に部員も少ない）、定期演奏会などの煩雑なマネジメントのメルクールへの丸投げ、音楽へのアプローチの違い、オケ・メルクールの部員のキャラクターの違いなどもあり、オケとメルクールの分離はもはや時間の問題であり、この解決は1958年度マネージャーの伊原隆三氏（1960年卒）に委ねられた。OBの意見にも耳を傾けつつ、メルクールとオケの首脳陣で数カ月に及ぶ議論が繰り広げられた結果、合同で定期演奏会を行うのは1958年度までとし、1959年度からは全く別々に定期演奏会を行うことと決定した（もう一つのビッグイベントである三商大交歓音楽会は引き続き両者が参加する）。とはいえマネジメント学年が途中入団者と長期療養からの復帰組を合わせても4人という非常に厳しい状況の中、伊原氏は中々士気が上がってこない20人程度の所帯のオケを叱咤しながら、翌年から完全な独立団体として存続させるための必死の努力を行ったのであった。1958年12月の第6回定期演奏会後、普通に考えればまだとても独立存続は出来ないような状況ではあったが、中村氏-伊原氏、そして翌年マネージャーの内田博之氏（1961年卒）の三代の必死の頑張り、金銭的な部分も含めメルクールの寛容な譲歩とサポートにより、よちよち歩きではあるものの、一橋オケはいよいよ自主独立の存在として歩み始めることとなったのである。



4. 第三期（1959 年～1971 年 6 月）＜尾原勝吉氏常任期＞

わずか 20 名前後の団員数。楽器もろくに揃わず（ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ホルン、ティンパニが 1 組ずつあるのみ）、出席率も良くないといういわばオケの体^{てい}を成していない状態からメルクールと分離しての単独スタート。しかも 1959 年 6 月には早くも三商大交歓音楽会東京公演が開催され、その際オケは大阪・神戸からやって来る自分たちの倍以上の人数のオケメンの宿泊の手配や練習会場手配などもした上で、三大学合同オケを幹事団体として取り仕切らなければならない。そのような絶体絶命の危地において、独立第一期目の舵取りを任された内田博之氏が行なったことは、プロの常任指揮者の選定であった。戦後オケはこれまで、ほぼ全て卒団生に指揮を依頼しており、第二期終盤は大学に残っておられた若き日の赤場準一氏（当時は赤場淳介）にお願いしていたが、独立したオケとして一層の飛躍を成し遂げるためにはどうしても、アマチュアに理解があり経験も豊富なプロ指揮者に指導を仰がねばならないと考えたのである。そこで内田氏は、長く一橋オケ



尾原氏初指揮による三大学混成オケ

と盟友関係にあった東工大オケの常任指揮者であり、音大ではない明治大学出身でありながら日本管弦楽運動最初期から第一線で活躍し続けた尾原勝吉氏に白羽の矢を立てた。既に複数大学オケの常任を引き受けておられた尾原氏は一橋オケの現状を聞き、当初ためらわれたが最終的には懇願を容れ、難役を引き受けて下さった。そしてここから一橋オケの大躍進が始まったのである。尾原氏は、三大学混成オケを見事に統御し、当時の一橋オケ単体の編成・実力では到底望むべくもなかった大曲・ドヴォルジャーク交響曲第 9 番「新世界より」を高い手腕で纏められた。さらに 11 月の初のオケ単体となる第 7 回定期演奏会（ベートーヴェン交響曲第 1 番等演奏）でも、当時としては最高の檜舞台である杉並公会堂において、オケから可能な限りの底力を引き出し、公演を大成功に導いて下さった。この年からは津田塾の弦楽合奏団であるアンサンブルフィオリータとのクリスマスコンパも始まり、硬軟ともに年間活動が充実を見た。

さらに翌 1960 年一橋オケは、ようやく単独開催コンサートを 1 回開催したばかりという状態にも拘わらず、今度は清水での演奏旅行を引き受けてしまった。楽器運搬・エキストラ手配・宿泊手配等のノウハウ皆無の中、堀野義彦氏、下田和夫氏、マネージャーの内藤道氏



(いずれも 1962 年卒) の奔走と、清水の代表的企業・鈴与の副社長(後に社長)であった本学 OB 鈴木要二氏(1937 年卒)のご協力、さらにはオケとして異例の 11 日にも及ぶ夏合宿での猛特訓により、こちらもどうにか成功を収めることが出来た。その 1 か月後となる第 8 回定期演奏会も盛況のうちに終わった。

これ以降、オケの活動は安定期に入ってくるが、逆にそうなればこそ、メルクルでは数年前から議論されていたメンタルハーモニー論やヒューマンリレーション論がオケ内でも盛んになってくる。要は「音楽が一番」なのか「人間関係が一番」なのか、という議論である。1961 年度マネージャーであった鈴木誠氏(1963 年卒)が団内誌に掲載した論文「一橋悪管論」等はその典型例である。これは、楽器が足りず必ずしも熱心ではない団員も少なくない段階では、どうしても中心的な論点になる問題ではあった。

1963 年度はサブマネージャーであった瓦林秀嗣氏(1965 年卒)が積極果敢に動き、翌年からの三商大演奏会のオケ不参加(この頃、管弦楽に関しては、三商大での演奏の意義が急速に薄れてきていた)、本格的演奏旅行の举行、トッププロ奏者であった辻久子氏を一橋祭へ招聘し一橋オケ伴奏にて協奏曲演奏をして頂くなどの大きな改革を断行した。

一方で 1964 年、1965 年度マネジメントは、強く踏んだアクセルを緩める方向の運営を行い、今後は基本的にそちらの路線へと転換していったが、それにより定着団員数も増加(4 年連続 2 ケタ)、オケの成長軌道はさらに安定的なものとなった。また 1965 年度には二つ大きなトピックがあった。一つは津田塾大学アンサンブルフィオータとの合同演奏会(別名ジョイントコンサート。紆余曲折の後、この枠は現在のスプリングコンサートとなる)がスタートしたこと。そしてもう一つは初の女性団員となる黒田美智子氏(1969 年卒)が入団したことである。黒田氏は 1967 年度に初のコンサートミストレスを務め、オケの中心となって活躍されることとなるが、黒田氏の入団は、その後の女性団員入団の突破口となり、この後のオケ飛躍に向けた大きな礎となった。また 1966 年には東校舎側に広い部室を獲得(この部室は 1996 年まで使用)、さらに 1967 年度には悲願ともいえる全パートに新入部員が入るという快挙も成し遂げた。分離直前の 1958 年度第 6 回定期では、管楽器の 7 割が団員以外の OB やエキストラでまかなわれていたものが、1967 年度第 15 回定期(一橋オケ史上初となるブラームスの交響曲への挑戦であった)では、逆に管楽器の 8 割を団員が占めたのを見れば、この僅か 10 年足らずの間に一橋オケが如何に長足の大躍進を遂げたか、一目瞭然であろう。

しかし 1968 年初旬から始まった学生運動は 1969 年度になるや一橋大学においても決定的に大きな動きとなり、それは一橋オケにも深い爪痕を残した。5 月 31 日の合同演奏会直前に、過激派学生による国立本館封鎖や、国立・小平でのストライキが発生し、それに共感する団員・反発する団員の軋轢が起き、中核メンバーの何人かが退団や休部をするという事態に陥り、合同演奏会の開催も危ぶまれるところまで立ち至ってしまったのである。この年の委員長(1964 年度からマネージャーでなく委員長という呼称に変わった)は河原泰則氏



(1973 年卒) であり、河原氏はのちに桐朋学園に進学し (一橋大学も卒業)、ソリストとしての活躍は勿論、世界的オーケストラであるケルン放送交響楽団の首席奏者となるなど、世界トップのコントラバス奏者にまで昇り詰めた、一橋オケ史上音楽面における最高の成功者だが、その河原氏は委員長の学年時、コントラバスの代わりに、辞めてしまった奏者の穴埋めとして、やむなくオーボエを吹かざるを得なかったのである。こういった状況下、合同演奏会はどうか中止にならず、冬の定期演奏会も開催は出来たものの、定期演奏会は従来よりかなり規模を縮小した形で開催せざるを得なかった。1967 年の入学時には質量ともに史上最高とっていい陣容だった 1969 年度マネジメントの方々の悔しさは察するに余りある。

このような苦しい状況でオケを引き継いだ 1970 年度マネジメントは委員長・奥富三平氏 (1972 年卒) を中心に、ギリギリの台所事情の中、新入生歓迎小旅行や室内楽企画を企画するなど、団員の繋ぎ留めと士気の高揚をはかった。

しかし学生運動の余瀾もあったのであろうが、新しい風を求めるという雰囲気が世の中のみならずオケにも漲る中、1971 年度マネジメントは委員長・由井真人氏 (1973 年卒) のもと、オケとしてもここ数年の士気の停滞と団員数の減少を一気に打開したいという考えを懐^{いだ}くに至り、新入生からみれば 50 歳以上も年上の大指揮者よりも、清新な若い指揮者に常任をお願いする決定をくださった。そして由井氏はその旨を尾原氏に伝え、尾原氏は 1971 年 6 月の合同演奏会をもって一橋オケ常任をご勇退されることとなった。しかし一橋オケが今日の隆盛を迎えることが出来た礎には、紛れもなく尾原勝吉氏時代の大躍進があることを一橋オケ関係者は決して忘れてはならないだろう。

5. 第四期 (1971 年 7 月～1983 年) <デヴィッド・ハウエル氏常任期>

由井真人氏ら 1971 年度マネジメントが尾原氏の後任として常任指揮者をお願いしたのは、1968 年に来日し、東京藝大の大学院で邦楽と指揮を学んでいた英国人指揮者・作曲家のデヴィッド・ハウエル氏であった。当時まだ 25 歳で、尾原氏からすれば 46 歳も年下、まさにオケ部員からすれば「お兄さん」の世代である。清新さを求めるにしてもあまりに大胆な転換ぶりであったが、この決断はオケにとって大きなプラスとなった。12 月の第 19 回定期演奏会では、第 15 回定期の一橋オケ初のブラームス交響曲第 1 番からスタートしたブラームス交響曲ツィクルスの完結編となる第 2 番が演奏された (第 17 回は前述の如く大学紛争のためブラームスの交響曲を演奏出来る状況ではなかったが、第 16 回は第 3 番、第 18 回は第 4 番を演奏していた)。さらに 1972 年 5 月には、一橋オケ史上唯一となる本格的オペラ公演であるプッチーニ『ラ・ボエーム』を演奏した (津田塾大学アンサンブルフィオリータと合同演奏)。このために行われた 4 月 1 日からの春合宿には、桐朋学園に合格したばかり



でまだ入学式も行っていない青年がトレーナーとして参加し、生まれて初めてオーケストラというものを指揮・指導した。この青年こそ 1979 年以降、今日に至るまで半世紀近く数多の一橋オケ演奏会を指揮して下さることになる大恩人・田中一嘉氏であった。堤俊作氏指揮による『ラ・ボエーム』はオケ主催でなく、慣れないプロの歌手との合わせということもあり苦労はしたようだが、オケとしては記念碑的公演となった。さらに同 1972 年の 7 月には、一橋オケとして初となるサマーコンサートが開催された。二部構成で前半はクラシック、後半はハウエル氏が得意とする編曲ものでビートルズナンバーや日本の民謡が演奏された。このコンサートは聴衆・奏者双方から圧倒的な好評を得て、以降ハウエル氏常任期のサマーコンサートは、ハウエル氏の作曲・編曲作品を主体としたポップスコンサートに近い構成の演奏会となり、これは一橋オケの夏の名物となっていく。

またハウエル氏常任期はサマーにとどまらず、これまでのドイツ系作品主体からオケのレパートリーが大きく広がっていった。一例を挙げれば、1973 年 11 月の第 21 回定期には、戦前に第 6 番に挑戦して以来、戦後のオケの陣容では手が付けられなかったチャイコフスキーの交響曲（第 5 番）に、それまでの一橋オケ史上最大編成で挑み、大きな成果を挙げた。さらにその 5 か月後となる 1974 年 4 月のジョイントコンサートでは超大作ブルックナー交響曲第 3 番（一橋オケ史上初のブルックナーで、同曲のアマチュア日本初演である可能性が高い）に、そしてその 7 か月後となる 11 月の第 22 回定期では大曲シベリウス交響曲第 2 番（一橋オケ史上初のシベリウス交響曲）にトライ、さらにその 11 か月後には後述する一橋大学創立 100 周年記念第九演奏会を開催し、未曾有の成功を収めたのである。この連続した大曲への挑戦は、一橋オケが学生運動による衰退から完全に回復したことを意味しているのと同時に、一橋オケらしいチャレンジ魂の発露、そしてハウエル氏常任期の著しいレパートリーの拡大をも物語っているのである。

1973 年 3 月には、一橋オケとしては唯一となる津田塾アンサンブルフィオーリータとの合同演奏旅行を行い、2 公演と音楽教室を開催し好評を得た。

1974 年度はオケの在り方を大きく変える歴史的決断がなされた。即ちインカレ化である。当時既に他大学生も団友という形で数人存在はしていたが、基本的には津田塾大学の弦楽器奏者については津田塾のアンサンブルフィオーリータに所属し、賛助で出演するという暗黙の了解があり、また管楽器パートにおいても、人が足りない状況でなら（実際それまで管楽器で余剰人員が出るなど考えられなかった）、他大の人に団友で入ってもらえれば御の字という状況が続いていた。ところが 1973 年度に初めてフィオーリータに参加しない津田塾弦奏者が団友となり、1974 年度には既に 4 人いたクラリネットパートに津田塾女性が入団を希望したのである。永井健氏（1978 年卒）を委員長とするマネジメントは、音楽部・オケ・メルクールの卒団生組織である**如水会音楽同好会（OBOG 会）**との関係などを考慮し、団友



に限定的な権利を認める折衷案を通そうとしたが、大激論の末それは否決され、結果として団友はオケにおいて実質的に一橋学生と同じ権利と義務を有することとなり、いつしか団友という概念すらなくなっていった。この大きな決断は、1965 年の女性団員の誕生と共に、一橋オケの飛躍・発展の最も大きなターニングポイントとなったのである。

そして一橋大学創立 100 周年にあたる 1975 年は、3 月に演奏旅行を行った後、10 月 10 日に 100 周年記念演奏会として、

メルクール、ユマニテ（一橋・津田の混声合唱団）、プルニエ（津田の女声合唱団）と合同で、夢の晴れ舞台である東京文化会館において、ハウエル氏指揮にてベートーヴェン交響曲第 9 番を演奏し歴史的な大成功を収めた。

第九の半年後

となる 1976

年 4 月の第

23 回定期で

はハウエル

氏のお国も

のイギリス

作曲家作品

が 2 曲取り

上げられ、以

降イギリス

作品の比重

が増してい

くことにな

る（第 23 回

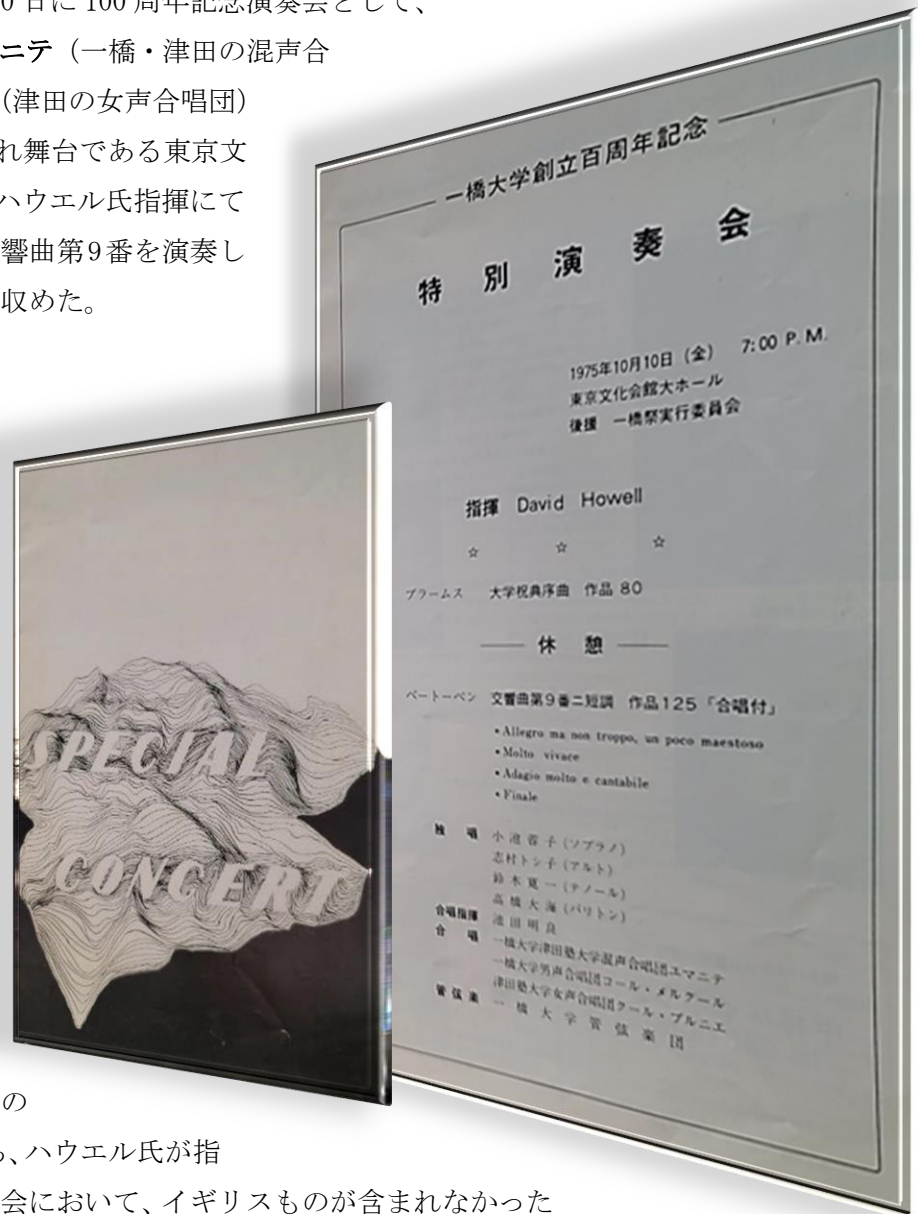
から第 32 回までの

10 回の定期のうち、ハウエル氏が指

揮した 9 回の演奏会において、イギリスものが含まれなかった

演奏会は 1 回のみ）。

基本的にマネジメントが受け持つ一年間のスケジュールが、サマーコンサート-冬の定期演奏会-春の合同演奏会の三大演奏会を中心としたものに路線が固まり、サマーはハウエル氏によるポップス編曲、定期はハウエル氏お得意のイギリスものを織り交ぜた非独逸系プログラム、春は独逸系を中心とした堅牢なプログラムというユニークな特色も打ち出して



いったが、1978 年の教職就任に伴うハウエル氏の大阪移住は、ハウエル氏と一橋オケとの関係を徐々に希薄化させていく遠因となった（実際、ハウエル氏転居後初めての冬である 1979 年 1 月はハウエル氏常任期間中で唯一、定期をハウエル氏でない鷺見尚保氏が指揮をした）。

そして正にそのタイミングにあたる 1979 年 5 月のジョイントコンサートでは、正規の演奏会としては初めて田中一嘉氏が指揮台に立たれた。以降、田中一嘉氏は今に至るまで半世紀近く一橋オケを指揮し続けて下さり、氏は一橋オケが最も長い期間お世話になった指揮者となっている。

そして 1980 年 4 月の合同演奏会において、今や一橋オケの代名詞ともなっているマーラーが初めて取り上げられた。この時コンサートマスターであった小林昭寛氏（1978 年入学なれど、学問好き？が嵩じて 1986 年卒）は一橋オケにおけるマーラーの使徒であり、少し話が先になるが、1983 年 12 月には当時アマオケはまだ 2 団体しか演奏していなかったマーラーの最高傑作である交響曲第 9 番を、一橋オケ正規活動外の「**国立マーラー楽友協会特別演奏会**」として演奏したのである。当初一期一会となるはずだったこのとてつもない試みは、幸い翌年以降も後輩たちに引き継がれ、現在も続く「マーラー交響曲第 9 番を毎年演奏し続ける」という、世界でも唯一無二のユニークなイベントとなって定着している。

1980 年度マネジメント最後の演奏会である合同演奏会（田中一嘉氏指揮）に向けた 1981 年 3 月の春合宿から、第五期・第六期で一橋オケ並びに卒団生が正規・課外を通じて最もお世話になることになる齊藤栄一氏がトレーナーデビューを飾った。齊藤氏は京大オケ出身で、本職は美術史研究（後に大学教授になる）だが、京大で学生指揮者を務めていたこともあり、田中一嘉氏に指揮を学んでいた。その齊藤氏はトレーナーデビューを飾るや、たちまち団員の心を掴み、以後 40 年以上にわたり、一橋オケのトレーナー陣の中核としてオケの向上に尽力を頂いている。正規の演奏会の指揮こそ 1999 年の第 47 回と 2020 年の第 68 回定期のみだが（それとても、「正規公演で指揮された指揮者はそれ以後トレーナーとしてお願いしない」という一橋オケの不文律の唯一の例外として、その後もトレーナー指導をお願いし続けている）、上記国立マーラー楽友協会のマーラー交響曲第 9 番全曲演奏は全て指揮（恐らく氏は世界で最も多くマーラー交響曲第 9 番を振った男である）されたのみならず、後述する 1985 年 3 月に結成され現在まで約 40 年続く卒団生を中心とした**水星交響楽団**の常任指揮者としてほとんどの公演を指揮され（最近でも若手卒団生オケである**イストリア**や**エセンツ**等を指揮）、さらにこれも後述する**二十世紀管弦楽団**やメモリアル譜読みなどでは毎回指揮をして下さるなど、現役オケ・卒団生オケの精神的支柱となっているのである。

1981 年度は新入団定着者が空前の 32 名となった。前年の新入団定着数が僅か 11 名だったこともあり、死に物狂いで新歓活動を行なった結果ではあったが、それまでの最大が 19 名、15 名を越えたことすら過去に 4 回しかなかったことを思えば、とてつもない人数である。そしてこれ以降は逆に新入団定着者が 20 名を下回ることは殆んどなくなり、一橋オケ



が現在のようなマンモスオケとなるきっかけとなった。1965 年の一橋女子学生入団、1974 年のインカレ化という二つの「仕込み」はここに至って一気に大輪の花を咲かせたのである。

この巨大化も少なからず影響しているが、1982 年以降はそれまで 11 回行われてきた合同演奏会（ジョイントコンサート）をとりやめ、同じ時期に一橋オケ単体としてスプリングコンサートを行うこととなった。これで現在に続く三大公演が出揃ったことになる。さらにこの年の第 30 回定期演奏会は、恐らく日本初演となるディーリアスのヴァイオリン協奏曲（ソリストは古沢巖氏）と大曲ホルスト『惑星』（バスオーボエを用いた完全版としては恐らく日本初演）をメインに行なわれ、大成功裡に終わった。さらに 1983 年の第 31 回定期はベルリオーズの幻想交響曲がメインながら前半はイギリスもの、1984 年 12 月の第 32 回定期に至ってはハウエル氏趣味が完全全開となり、ホルスト：パーフェクト・フル、ディーリアス：チェロ協奏曲、エルガー：エニグマ変奏曲、アンコール ヴォーン-ウィリアムズ：グリーンズリーヴス、エルガー：威風堂々第一番という徹頭徹尾オールイギリスプログラムとなり、大きな成功を収めたが、若手の中には必ずしもイギリスものに固執しないメンバーも増えてきたこともあり、ハウエル氏はこの第 32 回をもって退任されることとなった。しかしハウエル氏は、尾原氏によって地力を引き上げられた一橋オケのレパートリーを一気に拡大し、サマーコンサート等を通じ、音楽の柔軟な愛し方を教えて下さったのであり、やはり戦後一橋オケにとっては、尾原勝吉氏と共に最も大切な存在であったといえる。

6. 第五期（1985 年～2000 年 4 月）

これ以降はオケのあり方にそれほど大きな変化はなく、特に第五期・第六期と分ける必要がないが、とりあえず長い期間に及ぶこともあり、卒団生組織との関係性が大きく変わる 2000 年 4 月をもって、便宜的に二つの期の分かれ目とする。第五期以降の一橋オケは常任指揮者を置くことなく、マネジメント学年毎の意向に沿って独自の路線を歩んでいく。第四期のラストでも少し書いたが、この頃の学生達にとってポップスコンサートとイギリスものだけが魅力的であった訳ではなく、

- 1983/12～ 国立マーラー楽友協会（マーラー交響曲第 9 番、斎藤栄一氏指揮。4 年生がマネジメント）
 - 1984/ 7～ 二十世紀管弦楽団（「ウェストサイド物語からシンフォニックダンス」を中心とした 20 世紀音楽、斎藤栄一氏指揮。4 年生がマネジメント）
 - 1985/ 3～ 卒団生を中心とした水星交響楽団始動（現役も参加し大曲を演奏、斎藤栄一氏指揮）
 - 1985/11～ 一橋祭における兼松講堂での 4 年生がマネジメントする奏楽
- といった自主企画や従来のルーティン外の演奏がこの頃から次々と増えていった（また、これらの企画に斎藤栄一氏が不可欠だったことは明白であった）。そしてこういった多様化した活動が、従来の三回の演奏会だけでは物足りなさを感じる団員のニーズを満たしていく



こととなる。第二期・第三期の「人がいない、楽器がない、金がない」という状況からすれば隔世の感ある激変ぶりである。

この時期からはマネジメントが、前年度のスプリングコンサート終了後に引継ぎを行い、7月のサマーコンサート-12月の定期演奏会-4月スプリングコンサートの三つのコンサートを主催し、その合間に上記の新企画や小平祭・一橋祭の名曲喫茶などを行っていくというライフサイクルが確立された。以下、この期の大きな演目や動きなどを列記する。

第五期初年度となる1985年度は、初の非一橋大生コンミスが誕生した（津田塾大の矢野靖子氏）。また、正規活動外で、当時若手ヴァイオリニスト中、最も嘱望されていた古澤巖氏と一橋オケ名物男・小林昭寛氏をソリストに単発の「爆発演奏会」なるものも催された。そして正規活動としては第33回定期で、ハウエル氏に取り上げて来なかったマーラーを取り上げた（合同演奏会ではなく単体公演としては一橋オケ史上初）。またその年度のラストとなる3月には、永らく大学に在籍し続けた名物男・小林昭寛氏の卒業を祝い、メモリアル譜読み（無観客で卒業学年が希望する楽曲の通し演奏を行う）が齊藤栄一氏指揮で初めて開催された（とはいえ実はこの年、小林氏は武運拙く涙を呑み、実際の卒業はさらにもう一年後となる）。このメモリアル譜読みも今に続く行事として定着している。1985年4月に入学し、3年時に委員長を務めた祐成秀樹氏（1989年卒）は

私が入団した年に、常任指揮者制度が廃止されました。いわば、我々の代はハウエル氏を知らない第一期生にあたるわけです。入団したての頃は、あばら家のような部室や、コンパの席での乱痴気騒ぎを目のあたりにして、オケとは何とコワイ集団なのか、などと感じたこともありました。しかし、当時のマネージメントの人々の間に漲っていた「新しいオケづくり」への気魄が、ひしひしと胸に伝わってきたものです

と当時の熱っぽい雰囲気을回想している。

1988年11月には全日本大学オーケストラ大会に出場し、優秀賞を受賞した。この大会にはこの後も断続的に参加している。翌1989年サマーコンサートは、モーツァルト：魔笛序曲、ハイドン：ロンドン交響曲、ヒンデミット：交響曲「画家マチス」というプログラムを組んだが、それを五七五にした「一橋 魔笛ロンドン 画家マチス」というキャッチフレーズはとても語感がよく、その演奏会に参加していない代にも永く語り継がれた。

1990年度マネジメントは極めて意欲的な代で、名コンミスであった南咲子氏（1992年卒）を擁し、サマーコンサートは3曲ともコンミスの長大なソロがあるプログラムを、第38回定期では一橋オケとして2回目、単体としては初となるブルックナーを（第3番）、そしてスプリングは完成間もない池袋の東京藝術劇場で、ブラームス交響曲第1番とサン＝サーンス交響曲第3番のダブルメインという巨大なプログラムで3公演を行い、いずれも大成功を収めた。



1992 年度の第 40 回定期は、正規活動としては「禁じ手」であったマーラー交響曲第 9 番を演奏。首謀者はコンマスだった筆者であるが、この余波で、それまで毎年行われていた国立マーラー楽友協会はその後 14 年の間、現役主体でマーラー交響曲第 9 番全曲を演奏する風習がなくなってしまい、その間は散発的に卒団生企画として催されることとなった。筆者はいわばその「A 級戦犯」であり慙愧の念に堪えないのだが、大変喜ばしいことに国立マーラー楽友協会によるマーラー交響曲第 9 番全曲演奏は、2006 年以降は現役企画として再び定着することになる（後述）。

1993 年度の第 41 回定期ではブルックナー交響曲第 7 番が、1994 年の第 42 回定期ではマーラー交響曲第 1 番が取り上げられ、第 38 回から第 42 回の 5 回のうち 4 回がブルックナーかマーラーがメインとなる。それ以降も



正規演奏会で唯一マーラー 9 を演奏
コンマスは筆者（1992 年）

第 43 回ラフマニノフ第 2 番、
第 44 回ショスタコーヴィチ第 5 番、
第 45 回ショスタコーヴィチ第 10 番、
第 46 回ブルックナー第 4 番、
第 47 回マーラー第 1 番、

第 48 回ラフマニノフ第 2 番、
（これ以降は第六期）
第 49 回プロコフィエフ第 5 番、
第 50 回マーラー第 6 番、
第 51 回ショスタコーヴィチ第 5 番

と連続してブルックナー、マーラー、或いは 20 世紀ロシア-ソヴィエト音楽が選曲されるなど、定期演奏会での大曲志向ぶりが大きく目立った。第六期で詳述するように、この時期は卒団生組織（当時は如水会音楽同好会）との関係が最も希薄になっていた時期であり、第五期については卒団生の財政的援助をほぼ借りることなくこれらの巨大な公演をやり切っている。その辺りにも一橋オケが従来から持っているチャレンジ魂が強烈に反映されているといえよう。

1994 年 7 月、12 月に卒団生の呼びかけで卒団生と現役団員による室内合奏会が如水会館で行われ、またこの第一回公演の連絡がきっかけとなり、8 月に池の平音楽祭が開催されることとなった。第一回音楽祭こそ卒団生とその家族のみで行なわれたが、翌 1995 年からは現役団員も交えた音楽祭となった。この試みは、鈴木誠氏（1963 年卒）の

（卒団生と現役団員が反目することなく）「青春の一時期に一橋のキャンパスで音楽に熱中した」と云う共通項で単純に考えることが必要ではないかと思います。そ



の様な単純で、寛容な気持ちを大切に、世代を超えた交流の場を設けて、お互いの音楽を聴き合えば、「ナァーんだ、彼等も同じことをやっていたのだ」と理解しあえる

だろうという強い想いにより実現したものであるが、この努力は明らかに、2000 年以降により具体的に動き出す卒団生組織と現役一橋オケの関係改善に先駆ける、個人レベルによる、しかし大きなムーブメントであった。

1996 年 10 月には、小平の機能移転に伴って今まで部室のあった東キャンパスの A ホールに大講義棟の建設計画が持ち上がったため、1966 年 4 月より使用していた 30 年の歴史がつまった部室から、すぐ横の棟である元ギター部室へ移転した。これは現部室が完成するまでの仮部室であり、元の部室は間もなく取り壊された。

そして 1997 年からは前期祭は国立にて KODAIRA 祭として開催されることとなる。同年 5 月にはトレーナーとしてご指導頂いていた指揮者の大井剛史氏の依頼により、同氏母校の県立宇都宮高等学校での芸術鑑賞会に出演し、また同年 10 月には著名な指揮者である小林研一郎氏の指導と演奏という公開特別企画が兼松講堂で催され大きな反響を呼んだ。

1998 年 8 月には遂に完成した生協奥の学生会館 4 階の新部室（現部室）へと移転した。結果として 1966 年 3 月まで使用していた三代前の部室とほぼ同じ場所に戻って来たような恰好となった訳である。

1999 年 11 月、全一橋オケ卒団生中で最高の音楽的な成功を収められた河原泰則氏（1973 年卒）が来団され、指導・交流された。河原氏との交流は、2001 年 3 月の一橋オケ史上唯一の海外公演にも繋がっていくこととなり、また偉大な卒団生の存在を知ることは、現役生が過去との結びつきを考えるきっかけになったことであろう。

7. 第六期（2000 年 4 月～）

オケと卒団生の関係は、残念ながら 1980 年代頃から極めて希薄になっていた。最大の要因は、第二期以前すなわち音楽部分離以前の卒団生の帰属問題に端を発した（結果としては）中途半端な卒団生組織の立ち位置であった。即ち、分離以前の卒団生がオケ・メルクルのどちらか一方だけの卒団生会に帰属するという訳にはいかないだろうという判断から、それまでの卒団生の会であった如水会音楽同好会が存続することとなったのだが（分離直後は、このあり方芳しからずということで毎年のように大激論が交わされていた）、分離以降の卒団生からすると、学生時代にはほぼ交流が全くなかったオケとメルクルが同じ器である如水会音楽同好会に入れられてしまうということになり、そうなる则彼等が音楽同好会にあまり強い愛着や帰属意識を懐かなかったのもやむを得ないところであろうし、現役部活動を支援するにしても、集まった寄付金をオケとメルクルとで、どのような割合で按分するかなど、困難な問題が伴っていたのである。



もう一つ大きな要素としては 1955 年から発刊（戦前も一時期刊行）されていた音楽部年誌である『楽苑（がくえん）』の編集問題がある。当初現役音楽部員が編集を行い、オケとメルクルの活動報告やその時々の問題点に関する議論に加え、卒団生のエッセイや回想も掲載することで、全く組織化されていなかった卒団生の掘り起こしと組織化、さらには現役と卒団生の紐帯ちゅうたいを強めていくことが目標とされてきた。実際当初は、楽苑を卒団生に配布しつつ部活動への援助金を頂くというシステムが大いに機能していた。ところが質量ともに巨大化してきた楽苑の編集は、次第に現役学生の手に余るようになり、しかもオケとメルクルが完全に別活動をしているために連絡不行き届きから編集で大きな問題が生じることもあった。それをみかねた音楽同好会の長谷川庄一理事長（1928 年卒）や川島信理事（1954 年卒）が編集を肩代わりするようになるや、皮肉なことに現役学生にとっての楽苑の意味合いがさらに一層急速に薄れていってしまい、現役学生は楽苑の存在すら知らぬような事態に立ち至ってしまったのである。

また第四期中盤以降見られるように、惑星などの超大作では卒団生の援助を仰ぐケースがあったものの、基本的には一橋オケに楽器が揃い、学生達も（というより日本そのものが）次第に豊かになってきて、そこまで必死に卒団生の金銭的援助を求める必要性が薄れてきたことも挙げられる。

しかもオケは第四期初期にインカレ化に舵を切ったため、卒団生の一定割合がそもそも「如水会」音楽同好会には入れないという状況であった。これは一橋オケ卒団生にとって、音楽同好会への帰属意識をさらに薄める要素であった。

また副次的要素として、ハウエル氏退任問題で現役オケとハウエル氏と蜜月期だった頃の卒団生の間にややしこりが残ったこと、さらに若手卒団生によって結成された水星交響楽団と現役学生の結びつきが強くなったため、それよりも上の世代の卒団生が主体である如水会音楽同好会との関係性が一層薄れてしまったことも挙げられよう。

これらの要素が重なり、1990 年代には音楽同好会と現役オケとの関係は限りなくゼロに近い状態となっていた。現に 1990 年入学・1994 年卒業の筆者は第 40 回定期でコンマスを務めオケの中心メンバーの一人であったにも拘らず、現役時代には如水会音楽同好会の存在すら知らなかったのである。

しかしこのような状況に至った音楽同好会は、分離以前の卒団生が高齢化したこともあり、遂に卒団生組織をオケとメルクルに分離することを決意。2000 年 4 月 1 日より、音楽部同好会の中のオケ卒団生、並びに他大学のオケ卒団生によって**楽友会**（2016 年から**一橋大学管弦楽団 OBOG 会**に名称変更）が結成され、如水会音楽同好会理事長であったオケ大 OB である茅田俊一氏（1958 年卒）から下田和夫氏（1962 年卒）にバトンが受け渡され、下田氏が楽友会初代理事長に就任した。

分断の時期が長かったこともあり、2001 年 3 月のオケ史上唯一となる海外演奏旅行（後

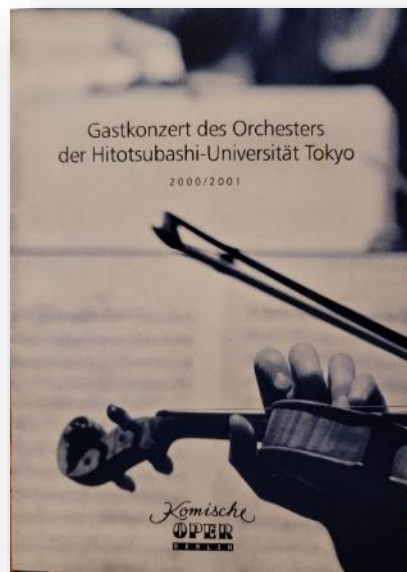


述)や2003年12月の大物指揮者・尾高忠明氏(一橋大の大恩人・渋沢栄一の遠縁)招聘公演の際に下田氏が主導して募られた楽友会からの高額な寄付のことすら数年で現役から忘れ去られるなど、中々現役と楽友会の絆は回復しなかったが、現理事長に就任された畠中正志氏(1971年卒)、現役時にも果敢な改革を次々に実行した監事の瓦林秀嗣氏(1965年卒)、さらに南咲子氏(1992年卒)、藤原誠明氏(2013年卒)といった若手理事等が、様々な改革を実行していった結果、徐々に関係性が改善し、現在はまだ途上といえるものの、一橋大学管弦楽団OBOG会の「現役オケ支援を第一に考えるOBOG会」というスタンスは明確に確立され、現役オケとの関係性もより緊密なものになってきているといえるだろう。

以下、第六期のめばしいトピックを列記する。

2000年6月24日、ベルリンフィルオーボエ首席のシェレンベルガー氏が来団、指導をされた。そして翌25日、シェレンベルガー氏(指揮も兼務)、同じくウィーンフィルフルート首席のシュルツ氏(奇しくも1920年に開催された一橋オケ(一橋グリー倶楽部)第1回演奏会に出演したピアニストの名前もシュルツ氏であった)、日本のトップハープ奏者吉野直子氏(一橋オケ創設の少し前から学内で一橋音楽会を結成し合唱活動を行っていた大先輩である吉野岳三氏(1919年卒)のお孫さんに当たる)をソリストに迎えたOBOG・現役混成オケの演奏会が兼松講堂で開催された。

2001年3月、一橋オケ史上唯一となる海外演奏旅行が挙行され、ケルン(ケルン大と合同演奏)、ベルリンで公演が開催された。指揮は長く一橋オケを指導される田中一嘉氏、そしてソリストには偉大な卒団生である河原泰則氏(1973年卒)と世界的に著名なラファエル・オレグ氏を迎え、両公演ともセンセーショナルな成功を収めた。同年7月世界的に活躍する指揮者・尾高忠明氏が来団しご指導を下さり、またその3か月後の10月、世界的指揮者・ピアニストであるウラディミール・アシュケナージ氏が一橋オケを訪問、指導して下さるというビッグイベントがあった。シェレンベルガー氏、シュルツ氏、吉野直子氏の演奏会、演奏旅行とアシュケナージ氏来団、さらに2003年の尾高忠明氏招聘など一連の超大物アーティストとの共演や海外遠征は、大手音楽事務所で重きをなされた卒団生の佐藤正治氏(1974年卒)の尽力によるところが極めて大きかった。



一橋オケ唯一の海外遠征(2001)

2002年12月、田中一嘉氏指揮する第50回定期演奏会で一橋オケとして初となるマーラー一交響曲第6番を演奏、2003年12月には日本屈指の大指揮者・尾高忠明氏を第51回定期に招聘してショスタコーヴィチ交響曲第5番を演奏、どちらも空前の成功を収める。



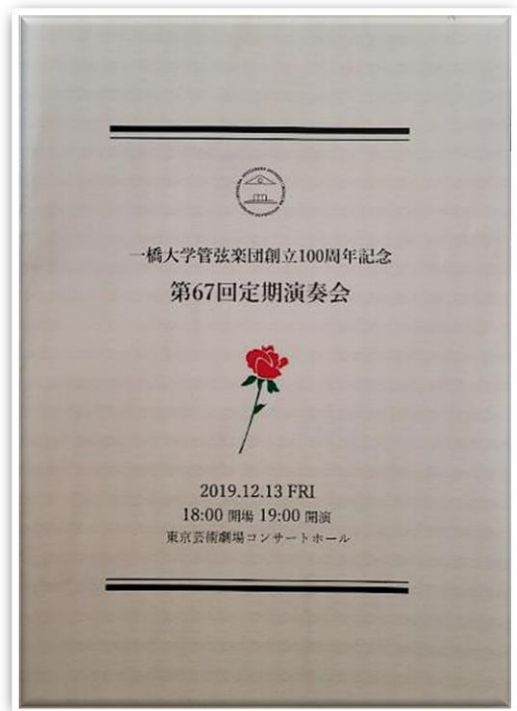
従来マネジメント学年は 7 月サマーコンサート、12 月定期演奏会、4 月スプリングコンサートの 3 演奏会を担当していたが、就職活動時期の関係で、2004 年度マネジメントは涙を飲んでサマーコンサート、定期演奏会のみで引退し、2005 年度からマネジメントは、4 月のスプリングコンサート、7 月のサマーコンサート、12 月の定期演奏会を受け持つこととなった。

1992 年の第 40 回定期で現役オケがマーラー交響曲第 9 番を演奏してしまった“暴挙”のため、久しく現役の手を離れていた国立マーラー楽友協会が、14 年の歳月を経た 2006 年 5 月に現役からの申し出により、卒団生から“大政奉還”され、現役企画へと戻った。以後、コロナ禍で 2021 年度公演が中止されたのを除き、毎年年末か年始のいずれかで必ず行われる名物企画となっている。また大政奉還後も卒団生による“おやじマラ 9”と呼ばれる卒団生企画としての国立マーラー楽友協会演奏会も数回開催したり、はては自らの結婚披露宴のかわりにマーラー交響曲第 9 番演奏会をウェディングコンサートとして企画してしまった水野未宙也氏（2014 年卒）・三浦真実氏（2016 年卒）夫妻のようなトテツモないカップルまで誕生したりと、一橋オケとマーラー交響曲第 9 番を巡る動きはとどまるところを知らず拡大・発展し続けているのである。

2012 年 12 月、田中一嘉氏指揮する第 60 回定期演奏会が幻想交響曲メインで開催され成功を収めた。以降、定期のメインにはエルガー交響曲第 1 番、第 2 番、マーラー交響曲第 1 番、ツェムリンスキー交響詩「人魚姫」などが選ばれ、再び大曲志向となっていく。

そして 2019 年 12 月、一橋大学管弦楽団創立 100 周年記念第 67 回定期において、大合唱を伴うマーラー交響曲第 2 番「復活」が演奏され、オケの歴史上最大級の大成功を収めた。

この歴史的成功を受け、2020 年度マネジメントには更なる輝かしい未来が約束されているかに思えたが、2020 年初頭より全世界を覆ったコロナ禍のため、一橋オケは言語に絶する苦難を味わうこととなった。スプリングに向けた 2 月下旬の春合宿まではどうにか開催出来たものの、スプリングコンサート、サマーコンサートは中止となってしまう。リモート企画として一橋祭の室内楽演奏は行えたものの、このまま管弦楽としての全活動が中止になってしまいかと思われた 11 月 26 日、突如大学側から限定的ながら活動許可があり、そこから会場・指揮者・演目・練習会場（部室の練習使用



一橋オケ創立百周年記念公演で
マーラー「復活」を演奏（2019）



は許可されなかった)などを突貫で取り決め(通常は会場・指揮者は1年ほど前に確保する)、齊藤栄一氏(田中一嘉氏と並ぶ第五期・第六期最大の恩人)の指揮により、12月26日に無観客ながら第68回定期を開催することが出来た。演目は大学紛争で大きく縮小せざるを得なかった第17回定期同様、かなり規模の小さいものにはなったが、どうにか開催出来たことは奇蹟的な快挙といえよう。とはいえ通常に比べれば考えられないほどの制約を受けた2020年度マネジメント学年はその後、**Orchestra Ann**というオケを立ち上げ、2022年2月13日、本来自分たちの代の初回となるスプリングコンサートで予定されていたブラームス交響曲第1番をメインに据えた演奏会を举行し、聴衆に大きな感銘を与えた。このオケは次回2022年10月9日、所沢のミューズアークホールにおいて、本来サマーコンサートで演奏するはずだった演目を演奏すべく、活動を開始しているが、後輩たちの素晴らしいたくましさに深い感動を覚える。

そして2021年度マネジメントは、スプリングコンサートが中止となり、さらに部室の使用を禁止され練習期間もごく短くしかとれなかったものの、サマーコンサート、第69回定期演奏会(こちらはクラウドファンディングを取り入れ、大きな成果を挙げた)をどうにか開催し、強い制約を受けていたとは思えぬ素晴らしい演奏を繰り広げたのであった。2022年度マネジメントは、幸い2年ぶりとなるスプリングコンサートを2022年4月9日(土)13時半より「ルネこだいら」にて開催出来ることとなった。このまま順調に活動が再開していき、部室の練習使用を含め、一橋オケが早く元のようなフル活動出来るようになることを強く願わずにはいられない。

8. 終わりに

以上、題名を裏切らずあくまでも「ラフスケッチ」ではあるが、一橋オケ102年の歴史を駆け足で振り返って来た。たまたま自分が在籍した時期は第五期中盤の非常に安定した時期であったため、現役時代は普通にのびのびとオケ活動が出来る有難みというものをさほど実感していなかったが、こうして100年以上の歴史を通して見ると、闇達に特段の制約も受けることなく活動出来ていた時期というのは意外にそう多くはなかったことに気付かされる。しかしそれと同時に、安定期は勿論、それ以外の苦難に満ちた時期であっても、先輩方、後輩達はそれぞれの状況の中、精一杯の努力をし、音楽を楽しみ、そして常に少々身の丈を越えて大きな目標に挑戦し、見事その挑戦を成功させてきているのである。1958年ご卒業の大OBである茅田俊一氏は、ご自身の現役時代のオケを「夢想家たちの楽園」と形容されていたが、全期間を通した一橋オケに対しても、その呼称は当たっているといえるのかもしれない。コロナ禍からの脱却に向け、日本としても世界としてもいまだに明確な明るい展望が描けぬ状況が続いているが、一橋オケがかつて同様ののびやかな活動を再開できるようになり、完全な意味で再び「夢想家たちの楽園」となる日が、一日も早く戻って来ることを心から祈念しつつ、筆をおくこととする。

